

カーテンの隙間から差し込む朝日で、ふと目が覚めた。

隣を見ると、道也はまだ眠っている。規則正しい寝息を立て、僕に背を向けて眠っている。四つも年下なのに、寝顔は整っていて、見ているだけで少し落ち着かなくなる。休日の朝は、二人ともいつもゆっくりだ。今日はどこにも出かける予定がなく、まるまる一日、道也と二人きりだ。昨日のことを曖昧にしたまま、逃げ切れるとは思えなかった。

(……昨日のこと、まだ怒ってる、かな)

昨日、会社で部下から相談を持ちかけられた。仕事のことでずいぶん思い詰めた様子だったから、放っておけず、つい二人で軽く飲みに行ってしまった。悪気はなかったけれど、道也に連絡しなかったのは僕が悪い。

帰宅すると、道也の機嫌は妙に静かで、「連絡くらいくれてもよかっただろ」と低い声で言われた。僕は怖くて何も言えず、気まずさを引きずったまま

ベッドに入った。眠る直前まで背中に感じる道也の視線がやけに重かった。

（結局、ちゃんと謝れないまま寝ちゃったな……）

そんなことを考えていると、背後で衣擦れの音がした。道也が寝返りを打って、こちらを向いた。

まだ半分眠そうな目が、ゆっくりと僕を捉える。

「……起きてたのか、英樹」

「あ……お、おはよう……」

低く掠れた朝の声。道也は僕の顔をじっと見つめ、それからふっと口の端をわずかに上げた。その笑い方が、朝からやけに悪い。まだ何も始まっていないのに、僕の心臓が勝手に速くなる。

「昨日のこと、覚えてる？」

「っ……そ、それは……相談に乗ってただけで……」

「うん。でも、俺には一言もなしだっただろ」

「っ……ご、ごめん……忘れてたわけじゃ、なくて……」

「わかってるよ。でも、それとこれとは別」

道也は眠そうな顔のまま、けれどその目だけははっきりと起きていて、僕をまっすぐ見ている。僕は思わずシーツの端をぎゅっと握った。この目をされると、いつもうまく逃げられなくなる。

「あの……道也、僕、ほんとに、ただ相談に……」

「へえ。じゃあ聞くけど、英樹。昨日、俺が何も言わずに黙ってたとき、ちょっとは悪かったって思っただろ」

「っ……」

「思っただろ。顔に書いてある」

答えられなかった。悪かったと思っているのは事実で、それを道也にあっさり見抜かれているのが恥ずかしくてたまらない。うまく言葉にできず黙り込んでしまっても、道也は僕の本音をいつだって簡単

に見つけてしまう。四つも年下なのに、僕のことを僕よりよくわかっているみたいな顔をして。

「今日は一日、俺の言うこと聞いてもらうから。昨日のお仕置きな」

「お、お仕置きって……そんな……」

「そんな、なに？」

「……は、恥ずかしいこと、するの……？」

消え入りそうな声で言ったら、道也は少しだけ目を細めた。僕のそういう反応を、道也はいつも面白がって見ている。

「わかってるじゃん。休みだし、時間はたっぷりあるからな」

そう言われてしまい、僕はもうこくりと頷くしかなかった。最初から逆らう勇気なんてなくて、道也に言われれば、きっと何でも従ってしまう。それが恥ずかしくて、けれど心のどこかで、ほっとしてい

る自分もいる。

「先にシャワー浴びてこいよ。それから、ちょっと付き合ってもらおう。昨日、俺に黙ってたぶん、ちゃんと反省させてやるから」

シャワーを浴びているあいだも、心臓はずっと落ち着かなかった。あたたかい湯を浴びながらこの後のことを想像してしまい、下腹の奥が勝手に疼く。そんな自分が恥ずかしくて、僕は俯きながら髪をかき上げた。

寝室に戻ると、道也はベッドに背を預けて座っていた。その手には、黒い布のようなものがある。目を覆うための、アイマスクだ。

「な……なに、それ」

「アイマスク着けろ」

「な、なんで、そんなの……僕が、着けるの……？」

「着け方は選ばせてやる。自分で着けるか、俺に着けられるか。好きなほう選べ」